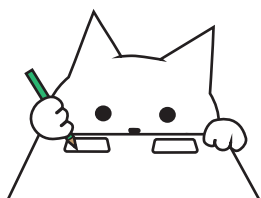


鑑賞シート 指導 の 手引き

no.19

特集

白と黒の秘密を探ろう



白と黒のイメージって・・・。

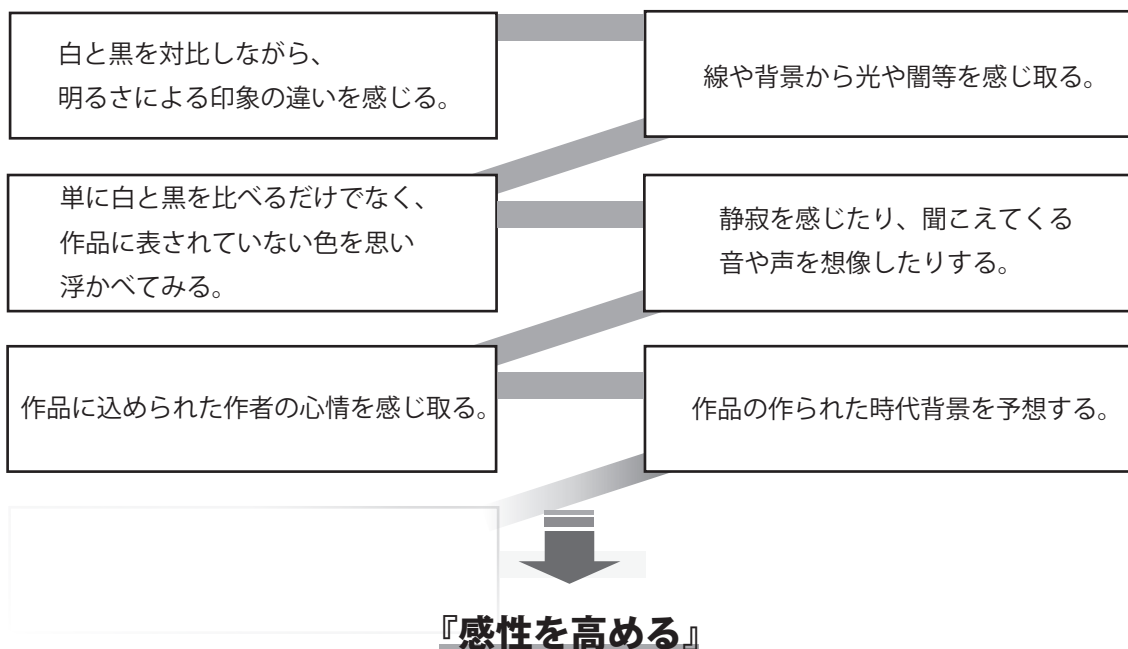
「白は全ての色を反射する色」「黒は全ての色を吸収する色」などと言われていました。また、「白は光」「黒は闇」「白は軽い」「黒は重い」など、さまざまな印象を持たれています。

みなさんは、「白」と「黒」にどんなイメージを持っていますか？「白黒をつける」という言葉がありますが、ここでは、どちらがよいかを決めるのではなく、「この白が・・・」「この黒が・・・」というように、「白」、「黒」それぞれが作品の中で効果的に描写されていることに気付いてほしいですね。

相反する色である「白」と「黒」のよさを見つけるために・・・さあ、シロにちゃんとクロにちゃんと一緒に「白」と「黒」の秘密探しに出かけましょう。

こんな力がつきます

この鑑賞シートを使った学習は、自分の好きな作品や気になる作品を選んで秘密を見つける活動が展開されます。鑑賞者は、秘密を見つけるために、知らず知らずに作品を細部までじっくり見ていくのです。そして、自分の心の中に持っている白や黒のイメージと、作品を対比させながら感性を働かせ、高めていくことができるのです。



学年の発達段階に応じて、活動を工夫することで発展的な学習展開が期待できます。



「秘密を見つけよう」

シロにゃんとクロにゃんの会話をヒントにしながら、白いところと黒いところの秘密を見つけしていきます。作品をながめていると、まずはじめに、この作品には多くの生き物が隠れていることに気付くことでしょう。その生き物は自然界に実在する物もあればそうでないものもいます。また、生き物以外のものを見つける子もいるでしょう。

「○○を見つけたよ。」「ここには、○○がか

くれているよ。」といった声が、あちこちから聞こえてきそうですね。

シートの秘密のメモ欄には、見つけたものをどんどんメモしていくのもいいでしょう。また、友達と交代で見つけた秘密を話し合うのも楽しいですね。そして、自分しか見つけられなかった秘密があると、より作品への興味が増すことでしょう。



子どもたちの、素直な発想を大切にしながら、たくさんの秘密を探っていく活動が展開されるといいでしょう。

ちょっと一言

活動が停滞してしまう子どもには、作品を近づけてみたり、遠ざけてみたりするよう促してみましょう。また、「このあたりを見てごらん。」と、ヒントを与えながら見つけさせてもいいですね。「自由な発想で秘密を見つけること」「じっくり作品と向き合うこと」ができればいいでしょう。

「みんなで秘密を探ろう」

p.2には、白い部分が多めの作品を、p.3には黒い部分が多めの作品が掲載されています。

シートを開いて左側の作品から、右側の作品までを順に眺める子もいれば、逆に右側から順に眺める子もいるでしょう。そうやって、作品を対比しながら鑑賞活

動が進んでいきます。

白い線と黒い線、白い背景と黒い背景、また、その中間などを比べることで、作品の秘密を見つけていけるといいでしょう。そして、白と黒の割合の違いによって感じ方も変わること気付いてほしいですね。



気になる作品が同じだった子同士が集まって、秘密について話合うのもいいですね。そうすることで、よりその作品への愛着が増すことでしょう。

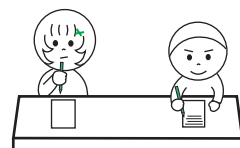
ちょっと一言

シロにゃんのおすすめ作品が気になる子もいれば、クロにゃんのおすすめ作品が気になる子もいるでしょう。それぞれ1つずつ選んでみるのもいいですね。あるいは、シロにゃんのおすすめから2つの作品、または、クロにゃんのおすすめから2つの作品を選んでもいいでしょう。

自分の気になる2つの作品を見比べながら、気付いた秘密をメモする活動を通して、知らず知らずの間に白と黒の世界に入り込んでいくはずですよ。

「シロにゃんとクロにゃんへ感想を書こう」

- └ 自分の選んだ作品について、シロにゃんとクロにゃんにお手紙を書くのもいいでしょう。
- └ 白のよさ、黒のよさをシロにゃんとクロにゃんに知らせてもいいですね。
- └ 白も黒もお互いに関連し合って、作品ができあがっていることにも気付いてほしいですね。



ちょっと一言

p.4にも白と黒が特徴的な作品を掲載しています。さらにじっくりと作品を見てほしいですね。また、作品に興味を持てば、QRコードを読み込むことで、作品について詳しい解説を見ることができます。実際に徳島県立近代美術館へ足を運んで、実際に作品を見てほしいですね。
(作品の展示時期については確認が必要です。)

発展的な学びも期待できます

「白と黒の世界をもっと広げよう。」(表現活動)

このシートを使って活動した後には、実際に自分の思いを「白」と「黒」で表現できる場を設定してみましょう。きっと、「白」と「黒」の魅力を再認識できることでしょう。



☆ 白と黒の描画材を準備して、
絵を描いてみましょう。

- ・鉛筆 (いろいろな濃さ)
- ・色鉛筆 ・ペン ・パステル
- ・コンテ ・木炭 ・チョーク
- ・マジックペン など

- ・いろいろな描画材を使って描いてみましょう。
- ・可能であれば、描く紙の種類も増やしてみましょう。
(画用紙、キャンパス紙、和紙 など)
- ・同じモチーフを、白い紙に黒で描いたり、黒い紙に白で描いたりして、感じを比べてみるのもいいですね。
- ・描画材の特徴を生かして、白や黒の濃さを描き分けた作品作りも可能ですね。
- ・版画で表現することも、もちろんいいですね。



基本的な流れ (25分)

阿南市立阿南中学校 小浜 かおり

*全25分の短時間教材で構成しています。時間等、実態に合わせてご使用ください。

	シートページ	活動の流れ	ポイント・大切にしたいこと
① (7分)	P.1 白と黒で表現された世界。 その中に、 見えてきたもの、発見した ことを友だちと話し合っ てみよう！	シロにゃんとクロにゃんの 会話を読みます。 白いところと黒いところの 秘密を探り、見つけたもの や、見つけたことをお話し します。	部分を見たり、全体を見たりして、見えてきた ものや発見したことを自由にお話しして友だち と共有します。 その時、 →白いところに注目してみると・・・？ →黒いところに注目してみると・・・？ のように、 視点を変えることで、新たな発見を促します。
② (7分)	P.2 気になる作品を選び、白と 黒の秘密を探ってみよう！	2～7番の作品を見て、 気になる作品を選び、作品 番号を記入します。 ①での活動と同じように、 白と黒の表現に注目して、 感じたことをメモします。	グレーの文字で書かれているヒントも手掛かり となります。その時、見えるものを発見するこ とだけでなく、目に見えないもの、例えば →聞こえてきそうな音や声 →描かれているものの感触 →勢いや強さ 等 を意識して見ると、鑑賞が深まります。 直感的に物事を捉えることが得意な子どもたち には作品に題名をつける活動も有効です。
③ (7分)	p.3 白と黒の秘密、発見したこ とを友だちと話し合っ てみよう！	メモした、白と黒の表現で おもしろいところや不思議 なところ、感じたことを友 だちと話し合います。	2～7番まで、白と黒の面積比が白が多いもの から黒が多い作品へと順番に並べられています。 そのことを子どもたちに伝えた上で、P.2の左か ら順にお話ししていくと、白や黒の作品ごとの 表現のちがいに気付きやすいと思います。
④ (4分)	P.4 シロにゃんとクロにゃんへ、 活動の感想を書こう！	白と黒の表現のいいところ を見つけたり、話し合っ たりする活動をふりかえり、 感じたことをメモします。	白で表現されているものと黒で表現されている ものは、単に光と影ではありません。作品 ごとの表現のちがい、白と黒だけで表現される 意味、よさや美しさは何か、を改めて考える時 間となります。

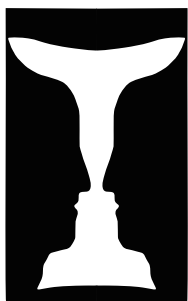


気になる表現を模写してみよう！ 木版画制作へ発展！ 水墨画に挑戦！ 等

白と黒の世界から 見え方、感じ方、意味づけの仕方のちがいを共有する

小浜 かおり

「自分ではAだと思っていたものが、人からBともいえると指摘され、なるほどそうともいえると教えられた経験は多いことだろう。」という書き出しから始まる、国語の教科書教材を思い出しました。『ちょっと立ち止まって』というこの資料には有名な3つの図版が掲載されています。一つは「ルビンの壺」、二つ目は「嫁と義母」、三つ目は「全ては虚しい」と言う作品です。「ルビンの壺」は、反転図形の中でも、図となる領域と地(背景)となる領域それぞれに注目する視点を変えることで見るものが変わる、図地反転図形。「嫁と義母」は、一つの図形なのに、二つ以上の対象(若い女の人と老婆)を見つけることができる絵で、意味反転図形と呼ばれるそうです。また「全ては虚しい」は、近くで見ると化粧台の前に座っている女性が見え、全体を少し遠くから眺めると、“どくろ”が見えてくるという距離による錯視の作品。いずれも人間の視覚によって2通り以上に解釈される多義図形から、筆者の考えをもとにして、物の見方や考え方を広げるという学習目標を持つ教材となっています。



今回は、既にその授業を受けている1, 2年生の美術部員が、「白と黒の秘密を探ろう」のシートを使って鑑賞活動を行いました。最初に「ルビンの壺」の授業のことを聞くと、印象的な教材として生徒の心に残っているようでした。「白と黒」の視点の交錯を味わう鑑賞シート。鑑賞活動は、多面的、多角的にとらえていく能力の活用が大切ですが、そこをシンプルに意識しながら鑑賞を進めていくことができたと思います。

次に、気になる作品として、12人の生徒が記し共有した鑑賞の内容や感想を掲載しておきます(7~9ページ)。25分ほどの活動でしたが、鑑賞者の見え方、感じ方、意味づけの仕方が多彩で、その相違点や共通点に触れる機会を通して、お互いに見方や考え方を広げることができました。参考にさせていただけると嬉しいです。

気になる作品について（12人の生徒のメモから）

作品 1

- ヤギ、トラ、花、草、ネズミ、大きな木の実、得体の知れない生き物が遊んだり休んでいたりする。
- オットセイ、サル、フラミンゴ、リス、最初は気づかなかった動物が次々見えてくる。
- 白ヤギ、ネコ、ネズミ、リス、それぞれ隠れている印象。

作品 2

- 線の動きが面白い。線をたどると面も見えてくる。鳥に見えたり、カエルに見えたり、芋に見えたり、文字?にも。???不思議。いろいろ感じられる。

作品 3

- 人の顔でもあり、黒電話でもある。聞いたりおしゃべりしたりしている。
- 時計?電話?人?唇?手?髪の毛?リボン?手?何か考えてる?
- 電話の受話器?聞くところが耳になっていて、話すところが口になっている。右側が壊れていて、左側が新しい感じ。
- 黒で心の重さを表し、白で嬉しさや無を表現している。左の6, 7, 8, 9, 0, は嬉しいとき、右の数が消えているのは憶えておきたくないこと。心の中で自分に話しかけているように見える。
- 全体はダイヤル式の電話。受話器のところが耳や口になっていて、体のパーツが組み込まれていることに気づいた。
- 異世界へと通じる電話機。使っている人が顔を隠しているように見える。1から5の数字が黒で塗りつぶされているようだ。

作品 4

- 「パン!」というはじける音が聞こえる。左が女性で、その右は子供?真ん中の白いところが光。
- 砂絵のように見える。白い部分は型を置いて、その上に砂をまいた感じ。つくりかたが気になる。
- 夜の暗闇の中、女性がいて、黒い手が忍び寄ってくる、サスペンス!

作品 5

- 恋人？お母さん？一人の女性が描かれている。線が重なっているところが黒、線がないところが白。窓からの光を感じる。下の黒い影のような物は？着物の模様の曲線から、作者の手の動きを感じる。

作品 6

- 白い線が黒の中で力強い。何かからの視線を恐れているように見える。
- 人が全員で、全員を守っている塊。何かにおびえている塊。
- 黒いところが、重く、力強く、迫力がある。白い鋭い線がそう見えさせている。
- 恐怖を黒で表している。白で、その黒の中に投げ込まれた、生命を表現している。小さな幸せを覆い尽くそうとする闇。
- 母は強い！という強さを具現化している黒。守ってくれた母をイメージしている。
- 怖がっている人が、お互い抱き合っている。白い線が重ねられて表情が浮かび上がる。

作品 7

- 真っ黒の中に、繊細な白い線で描かれたものが浮かび上がってくる不気味な印象。
- 全体的に黒いが、濃淡があり、光の空間を感じる。
- 前の作り物の動物が動き出しそう。音はなく、シンとしている。
- 動物はキツネ、上の果物は葡萄。真っ黒な中に浮かび上がっている。
- 葉脈の白の線が繊細で印象的。

作品 8

- 白と黒がはっきりしているのに、全体的には立体感を感じる。異世界感が面白い。
- 白の細かい表現は、形の連続によって、動いているようにみえたり、立体的に見えたりする。

作品 9

- 家、ビル、橋、建物がたくさん描かれている。背景の黒は静けさ。建物は光で賑やか？遠くからはやはり静かさを感じる。



感想



- 白と黒だけの世界で、表された世界観が、作者それぞれに違っている。色彩がなくても、伝えたいものが大きく感じられる。
- 白と黒で感性が磨かれました。
- 白と黒ではっきりしていて、おしゃれだと思った。最初白と黒は孤独なイメージがあったが、今回の鑑賞を通して、にぎやかな印象もあると思った。
- 白と黒だからこそ、想像をふくらませることができるのが面白い。
- はっきりしているので考えやすい。
- 白と黒で全てが描けてしまうと思います。自分は黒が多い方が好きです。無限に色を表現できて魅力的。
- 白のために黒が必要で、黒のために白が必要。お互いに必要な存在。
- 立体感、重力、音さえも表現している。
- 白と黒だけでも美しい。また白と黒だけだからこそ、錯視的に絵を楽しめる。
- 白と黒だけの表現で、水墨画を思い出したが、それとはまた違った感覚があった。
- 白は家や模様、型をはっきり表している。黒は不思議な形、陰影を表してものを立体的にしている。
- 白と黒だけでとてもきれいでした。でも、他の色みを感じさせる作品もありました。



「白と黒」シート 作品を見るヒントについて

徳島県立近代美術館

森 芳功

世の中にはさまざまな色があふれ、絵具も数多くあるのですが、あえて色を限定することで生まれる魅力もあります。このシートでは、「白と黒」に注目しました。

取り上げた9点は、版画の他、木炭で描いた作品、印画紙を用いた作品も含まれています。ただし白は、いずれも紙の色ですので、インクなどで使われた色は黒一色となります。さあこれをどう見たらいいのでしょうか。

授業がはじまったら、子どもたちはいろいろと発見し、楽しい意見もでてきますので、何よりもそれを尊重し、クラスやグループで共有できたらと思います。

1～3ページには、みんなで作品を見る時のヒントも掲げていますので、参考にしてみてください。どの作品を見る時も手がかりとなるのですが、ここでは一例として、ヒントとつながる点から作品を見てみます。いずれも観察したり、想像したりするのがポイントです。

◆「白いところに何かいるよ!」「黒いところも気になるなあ」(1ページ)

作品1は、フランツ・マルクの木版画です。画面左上の角のある動物は、よく目につきますね。黒で囲まれているので、白い姿が強調されて感じられます。

画面の右側には、黒い輪郭線で表された動物がいます。画面下の葉っぱは、逆に黒を多く残しているようです。他に、「黒と白」が入り交じったところもあって、よく見ていくと、不思議なものが見えてくるかもしれません。黒に注目したり、白に注目したりして、形を探してみよう。

ご存じのように木版画は、木の板を彫刻刀で彫り、インクをつけ、紙に刷り取ります。彫った凹の部分は白い紙の地のまま。彫り残した凸の部分は、インクがついて黒くなります。そこを少し意識して見るのも、面白いかもしれません。

◆「明るさにもちがいがあるなあ…」(2ページ)

2のカンディンスキーの作品も木版画です。こちらは、板を広く彫ったことで、白い部分が多くなっています。そのため、細い線やアメーバーのような黒い不定型な形がはっきり表れています。

他の作品はどうでしょうか。カンディンスキーの作品と異なり、暗い部分が多い作品もありますね。灰色の部分が気になる作品もあります。それぞれの違いを見ていきましょう。

◆「白と黒。どちらに注目?…」(2ページ)

4の瑛丸(えいきゅう)の作品は、「フォトデッサン」といって、印画紙に型紙を置いて露光させることで生み出されます。黒いところは、それだけ光が長く当たっているのです。画面左の明るい人物、その右にあるピカッと光るような白は、まわりが暗いだけに、ひときわ明るく感じられます。

白に注目し、そして黒に注目する。そのことで、互いに補いあっているようすに気付きます。

◆「音が聞こえてきそうだね…」(2ページ)

3の泉茂の作品には、電話の受話器が描かれていますので、通話の話し声を想像する子がいるはずで、6のケーテ・コルヴィッツに描かれた人たちは、みんなで何か声をかけあっているようにも思えます。

絵から聞こえてくる音や声はすべて想像によるものですので、子どもたちの自由な意見に耳を傾けたいと思います。オノマトペで表現しても楽しいですね。直接、「白と黒」に関わりがなくても、子どもたちから気付いたことを聞いていきましょう。

◆「心の声は…」(3ページ)

5の村山槐多の作品は、デッサン(素描)をするための木炭で描かれています。鉛筆のように細長いのですが、少し湾曲しています。持つと、とても軽く感じられます。

引かれた線の本一本を見ていくと、細い線、太い線があり、線をひくスピードも違っているのに気付きます。また、線を重ねていくと黒い面になり、手でこするとグレーの色となります。そこから、モデルを前にして描く画家の姿、息づかいかや想いを想像することもできるかもしれません。

「心の声」は、モデルから聞こえてくるのか、画家の声なのか。二つの見方があるのを知ると、想像を広げやすいかもしれませんね。

◆「奥行きは?…」(3ページ)

7の長谷川潔の作品は銅版画です。銅板にキズをつけ、へこんだところにインクを入れ、プレス機で圧力をかけて紙に刷りとりませう。木版画とは、凹凸の関係が逆。黒い部分ほど、細かなキズがたくさんつけられています。

この作品では、窓のようになった周辺の部分が、暗さのなかでほのかに明るくなっているのが分かるでしょうか。リアルに表されたキツネの置物とぶどうの明るさにも違いがあります。背景の黒に奥行きを与える工夫です。

では、その奥行きに何を感ずますか?

◆「線の勢いや強さはどう?…」(3ページ)

6のコルヴィッツも木版画です。彫刻刀で彫った線は、均等ではなく強弱がつけられていますね。8の日和崎尊夫は、硬い木口の板を使い、細い線や点を密集させるように表しています。コルヴィッツの

強弱のある線とは、かなり表情が違いますね。

同じ木版画でも、線を比べるだけで気付くことがあります、別の技法の作品と比べても発見があるのではないのでしょうか。

◆「光はどこから…」(3ページ)

9の一原有徳の作品は、銅版にインクを塗り、それを少しずつ掻き取り、紙に刷ることで表されています。抽象的な形の集まりは、未来都市のように見える人がいるかもしれません。さまざまに想像できるのですが、その光は…、内部から発光しているようにも、何かに照らされているようにも見えます。

他の作品もそうなのですが、光に注目すると、また別の気付きや、想像の刺激につながるように思います。

おわりに 「白と黒」の色の違い、色を想像して楽しむ

このシートでは「白と黒」に注目しましたが、実はその白や黒も、それぞれ微妙に色が違います。黒のインクや絵具も一様ではありませんし、木炭や印画では、その黒の色合いも異なります。

紙の白さもさまざまです。身の回りにある紙の色を改めて見直してみましょう。色だけでなく、肌触りも、つるつるしたもの、少しざらざらしたものなど個性が違いますね。画家たちは、自分の気持ちにぴったりの色や材質のものを選んで作品をつくっているのです。

しかし、その違いは印刷物で表現しにくいのは確かです。実際の作品を、美術館で味わう機会をつくっていただけると嬉しいです。

また、「黒と白」の表現から、色の世界を想像するのも楽しいかもしれません。日本など東アジアでは、水墨画の伝統があり、墨だけを使った絵にさまざまな色を感じて楽しむことができました。このシートの「白と黒」の表現から、色を想像して楽しむのもいいかもしれませんね。



鑑賞シート No.19 (p.4)

次のページ以降は鑑賞シート No.19 (p.4)「作品の事をもっと知ろう」のQRコードから開くページと同じものです。

作品と作者について

鑑賞シート「白と黒の秘密を探ろう」の作品と作者について紹介します。文中の下線は、徳島県立近代美術館ウェブサイト

で作品や作者に関連する情報を見ることができます。もっと調べたいときに活用してください。
*ウェブサイトの内容は予告なく変更する場合があります。ご了承ください。

1 〈動物伝説〉

1912年 木版、インク 和紙 19.9×24.0 cm

ここでは、野原でしょうか。いろいろな動物がいます。左上にいるのは長い角を持っています。牛かな、やぎかな、鹿かな。皆さんにはなに見えますか。ほかにもいますよ。さがしてみましよう。草のかげでかくれんぼしているかも知れません。動物になったつもりで、見えない動物の気配も感じてみましょう。

美術館ウェブサイトへのリンク

作品詳細情報 https://art.bunmori.tokushima.jp/srch/srch_art_detail.php?pno=2&no=1230764000

学芸員の作品解説 https://art.bunmori.tokushima.jp/text/yomi/1230764_1.html

フランツ・マルク

Franz Marc

1880-1916年 (ドイツ)

ドイツ生まれ。1911年に前衛的な画家のカンディンスキーやマッケとともにグループ「青騎士」を結成しました。表現主義的な作風を特徴としています。また動物をたくさん描いたことでも有名です。第一次世界大戦で命を落としました。そのあとナチスの時代になると、その新しい作風は、退廃的であるとみなされて、排除されてしまいました。

(S.T.)

2 〈黒い斑点〉(版画集〈響き〉より)

1912年 木版 紙 16.8×21.4 cm

黒いしみのようなものや、ぐにやぐにやの線があります。落書きみたいな絵ですね。なにを描いているのでしょうか。ここでカンディンスキーが描こうとしているのは、目に見えないものです。例えばどんなものがあるでしょう。気持ち、考え、におい、味、音、風などもそうですね。この絵では音の響きを描こうとしています。

美術館ウェブサイトへのリンク

作品詳細情報 https://art.bunmori.tokushima.jp/srch/srch_art_detail.php?pno=2&no=1230431000

高精細画像 (デジタルアーカイブ) https://adeac.jp/tokushima-bunkanomori/viewer/mp000880-200070/MAM_2022_031/

ヴァシリー・カンディンスキー

Wassily Kandinsky

1866-1944年 (ロシア)

ロシア生まれ。30歳の時、画家を目指してミュンヘンに行き、1911年マルクラとグループ「青騎士」を結成します。第一次世界大戦が始まるとロシアに戻りますが、戦後はドイツの造形教育の学校「パウハウス」の先生となります。1930年代はナチスからのがれてパリに亡命しました。抽象芸術の創始者の一人で、音に色を感じる「共感覚」も持っていました。

(S.T.)

3 〈テレホンマン〉

1956年 リトグラフ 紙 56.0×37.5 cm

手に持った受話器は耳とくちびるに変わり、もう片方の手をあてた人の顔は電話のダイヤルに変身してしまいました。友だちと長電話をしすぎたのかも知れませんね。作家は鉛筆の濃い線、薄い線を使い分けて、思いのままに空想の場面を描いたのでしょう。いつまでも話したい、会いたい思いで頭がいっぱい、そんな様子にも見えますね。

美術館ウェブサイトへのリンク

作品詳細情報 https://art.bunmori.tokushima.jp/srch/srch_art_detail.php?pno=2&no=1130532000

泉茂 (いずみしげる)

1922-1995年

大阪府生まれ。デザイナーとして働いた後、若い作家たちとデモクラート美術家協会を結成。印刷工場に技法を学びに行くなどして版画づくりに打ち込みました。銅版画やリトグラフ、油絵など色々な方法を試しました。泉の絵は、楽器が歌いはじめたり、時計やイスが人に変身したり、風景と動物が混じり合ったりして、自由な想像を誘います。

(T.T.)

4 〈壺と女〉

1950年 フォト・デッサン 紙 26.0×21.0 cm

墨を垂らしたような空間に、ロングドレスの女性と壺が浮かび上がっています。瑛九はカメラを使わず、紙の上に置いた物体に直接光を当てて現像させる「**フォトグラム** (レイヨグラム)」の手法を応用し、自ら切り抜いた型紙を使用することで、「フォト・デッサン」という独自の表現を生み出しました。女性と美をテーマにしたシリーズの優品です。

美術館ウェブサイトへのリンク

作品詳細情報 https://art.bunmori.tokushima.jp/srch/srch_art_detail.php?pno=2&no=1160004000

瑛九 (えいきゅう)

1911-1960年

宮崎県生まれ。本名は杉田秀夫。早くから『みづゑ』、『アトリエ』などの美術雑誌に評論を発表しながら、絵画や写真に強い関心を示します。1936年、フォト・デッサンの作品集〈眠りの理由〉を刊行。画家、版画家、写真家など多方面で活躍します。1951年、デモクラート美術家協会創立の中心的なメンバーとなり、巖嘔や池田満寿夫、磯辺行久など次世代の若い作家たちに大きな影響を与えました。

(S.M.)

5 〈女の顔〉

1914年 木炭 紙 60.0×44.5 cm

着物姿の女性の上半身が、木炭による黒一色で大きく描かれています。画面全体に力強く、自由自在に引かれた線から立ち現れる女性は、どこか悲し気な表情をしていますが、こちらを見透かすかのような大きな瞳と整った鼻筋、真一文字に結ばれた唇から、心の奥に秘めた強い意志のようなものが伝わってきます。それがこの作品の最大の見どころです。

美術館ウェブサイトへのリンク

- 作品詳細情報 https://art.bunmori.tokushima.jp/srch/srch_art_detail.php?pno=2&no=1150010000
- 学会員の作品解説 https://art.bunmori.tokushima.jp/text/yomi/1150010_2.html
- 高精細画像（デジタルアーカイブ）
https://adeac.jp/tokushima-bunkanomori/viewer/mp000120-200070/MAM_012/

6 〈母親たち〉（版画集〈7点組木版画集 戦争〉より）

1922-23年 木版 紙 34.2×40.2cm

真ん中の黒いかたまりをよく見ると、たくさんの人たちが、おびえた表情で抱き合っています。大人たちが作った囲いの輪の中には子どもたちの姿も見えます。大人たちはすべて女性です。大きな戦争が起こった時代でした。ここでは、お母さんたちが力を合わせて、戦争の被害からいっしょうけんめいに子どもを守っているのです。

美術館ウェブサイトへのリンク

- 作品詳細情報 https://art.bunmori.tokushima.jp/srch/srch_art_detail.php?pno=2&no=1230120000

村山槐多（むらやま かいた）

1896-1919年

愛知県生まれ（一説に神奈川県も）。幼い頃から文学や美術に熱中し、成績も抜きんでていたことから神童と言われました。中学生の頃、いとこの画家、山本鼎に絵の才能を見込まれ本格的に美術を学ぶと、一気に才能が開花。新進気鋭の画家として華々しくデビューし、ほとぼる生命力を感じさせるような作品を次々と描くも、わずか22歳の若さで亡くなりました。

(S.M.)

ケーテ・コルヴィッツ

Kathe Kollwitz

1867-1945年（ドイツ）

ドイツ生まれ。当時はまだ数の少なかった女性の芸術家として、表現主義的な作風の優れた作品を残しました。また医師の夫とともに、貧しく恵まれない人たちの手助けもしています。第一次世界大戦で息子、第二次世界大戦では孫を失ってしまいました。弱い立場の人々を、共感を持って描き出したドイツのプロレタリア絵画の先駆者としても知られています。

(S.T)

7 〈狐と葡萄 (ラ・フォンテーヌ寓話)〉

1963年 メゾチント 紙 35.4×26.4 cm

木の上のブドウを食べたいけれど背が届かない。キツネは「どうせおいしくないよ」と言いました。詩人のラ・フォンテーヌは、それもいい考え方だと本に書いています。そういえばキツネはすました顔ですね。歩く先には、幸せのアイテムである巻き貝が。暗い部屋に置かれた小物を使って、ちょっとしたドラマが描かれました。

美術館ウェブサイトへのリンク

- ・作品詳細情報 https://art.bunmori.tokushima.jp/srch/srch_art_detail.php?pno=2&no=1130384000
- ・学会員の作品解説 https://art.bunmori.tokushima.jp/text/yomi/1130384_1.html

8 〈KALPA-A〉

1968年 木版 紙 35.3×22.7 cm

生いしげる植物や虫や魚、あるいは岩石の多種多様な模様なのでしょうか。それらの形のすきまから、星空や大地のような風景も見えます。作品名のカルパ (KALPA) は、宇宙の無限の時間を意味する古いことばです。どうやらこの作品は、生き物も空も海も星も、宇宙の全てを一度に組み合わせさせて描こうと挑戦したのかも知れません。

美術館ウェブサイトへのリンク

- ・作品詳細情報 https://art.bunmori.tokushima.jp/srch/srch_art_detail.php?pno=2&no=1130833000
- ・学会員の作品解説 https://art.bunmori.tokushima.jp/text/yomi/1130833_1.html

長谷川潔 (はせがわ きよし)

1891-1980年

神奈川県生まれ。日本で油絵や版画、文学を学んだ後、27歳の時フランスへ渡ります。昔の銅版画技法「メゾチント」を現代に復活させました。それはざらざらの銅板を細いへらでこすって描く方法で、作品は真っ黒の画面に白い絵がらができあがり、まるで暗闇に光るようです。花や小物などを組み合わせ物語を想像させる作品をつくりました。

(T.T.)

日和崎尊夫 (ひわさき たかお)

1941-1992年

高知県生まれ。美術大学を卒業した後、版画家の恩地孝四郎の本を通じて、独学で木口木版画を始めました。硬い木を輪切りにした切り口(木口)に、極細の彫刻刀で絵を彫る方法です。この技法ができる人は当時少なく、日和崎が復活させたとも言われます。病気に苦しんだことから宗教や哲学の本を読み、無限の宇宙をテーマに描きました。

(T.T.)

9 ティーエーエヌ ビー
〈TANb15' 75〉

1960年 銅版モノタイプ 紙 31.4×44.6 cm

とがった形が波打つように重なっています。生き物がいるようには見えませんが、機械のガラクタの街か、はたまた遠い宇宙の星はこんな景色でしょうか。色々な空想を誘います。実は作家本人も、見たこともない風景に出会いたくて作品をつくるそうです。題名もただの記号です。絵の中に何を見つけ出すかは私たちにまかされています。

美術館ウェブサイトへのリンク

作品詳細情報 https://art.bunmori.tokushima.jp/srch/srch_art_detail.php?pno=2&no=1130593000

一原有徳 (いちはら ありのり)

1910-2010年

現在の徳島県阿南市生まれ。幼い頃に北海道へ移り、小樽で生涯を過ごしました。板の上にインクで描き、紙に転写する「モノタイプ版画」でデビューしたのは50歳の時。様々な工具や薬品で金属板に模様をつくる、実験的な版画も注目を集めました。彼の作品は、岩肌や機械部品のような模様が不思議で寒々しいような風景を連想させます。

(T.T.)

発行者

徳島県立近代美術館

発行日

令和4年3月31日（鑑賞シート no.19「白と黒の秘密を探ろう」）

令和5年11月16日（指導の手引き 暫定版）

令和6年1月5日（指導の手引き 改訂版）

●シートの作成

鑑賞教育推進プロジェクト

* 所属等は令和4年3月現在

脇本正久（吉野川市立川島小学校指導教諭）

小浜かおり（阿南市立阿南中学校指導教諭）

武田亜希子（徳島県立徳島聴覚支援学校教諭）

井上奈美（徳島県立脇町高等学校・穴吹高等学校教諭兼務）

岡田三千代、川真田心（鳴門教育大学附属小学校教諭）

齋藤友紀子（徳島市加茂名小学校教諭）

武知綾子（石井町高川原小学校教諭）

井上三月（徳島市加茂名南小学校）

植田仁美（北島町立北島小学校）

門田歩記（小松島市和田島小学校）

岩佐宣之（徳島県立総合教育センター指導主事）

山田芳明（鳴門教育大学教授）

竹内利夫（上席学芸員）、亀井幸子（係長）、森芳功（主席）

[デザイン] 増田くみ子（会計年度任用職員）

[協力] 著作権者の皆さま

作品図版掲載のご許可をいただきました。

●指導の手引き作成

鑑賞教育推進プロジェクト

* 所属等は令和5年10月現在

岩佐宣之（藍住町立藍住南小学校教頭）

脇本正久（吉野川市立川島小学校指導教諭）

小浜かおり（阿南市立阿南中学校指導教諭）

岡田三千代、川真田心、齋藤友紀子（鳴門教育大学附属小学校教諭）

井上三月（徳島市富田中学校）

植田仁美（藍住町立藍住東中学校）

森裕二郎（徳島県立総合教育センター指導主事）

森芳功（主席）、亀井幸子（主席）、笠井優（主任学芸員）

[執筆]

白と黒のイメージって・・・／脇本正久…………… 1

こんな力がつきます／脇本正久…………… 1

子どもの活動のようす（期待する子ども像）／脇本正久…………… 2

基本的な流れ／小浜かおり…………… 5

実践記録 中学生のようす／小浜かおり…………… 6

「白と黒」シート 作品を見るヒントについて／森芳功…………… 10

作品と作者について *…………… 13

* 執筆者（徳島県立近代美術館学芸員）はイニシャルで示しました。

友井伸一（S.T.）、竹内利夫（T.T.）、三宅翔士（S.M.）

[レイアウト] 大和田涼央（会計年度任用職員）

